

氏名	森本 喜代美 (もりもと きよみ)	
学位の種類	博士(看護学)	
学位授与番号	甲 第 16 号	
学位授与年月日	令和 2 年 3 月 4 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学位論文題名	続発性リンパ浮腫をもつ在宅高齢者への訪問看護介入リンパ浮腫ケアプログラムの構築 (Study of Construction of a Home-Visit Nursing Interventional Lymphedema Care Program for Elderly at Home with Secondary Lymphedema)	
論文審査委員	(主) 教授 教授 准教授	荒木 孝治 赤澤 千春 山崎 歩

学位論文内容の要旨

《緒言》

続発性リンパ浮腫（以下リンパ浮腫）は、がん手術に伴うリンパ節郭清術等に起因して発症し、いったん発症すると完治することは難しく、特に高齢者は加齢による筋力低下や皮膚の膠原繊維の硬化等から、発症、悪化のリスクが高い。またリンパ浮腫の平均発症時期は術後 5 年で、受療間隔が長くなり、在宅で生活している時期にあたる。超高齢社会の日本において、がんの長期生存は可能となり、高齢者のがん罹患患者数は全がん罹患患者の 70%にあたる。これらことからリンパ浮腫を発症し、在宅で療養する高齢者は少なくないと推察される。在宅高齢者の療養生活を支援する役割を担う訪問看護によるリンパ浮腫ケアの充実が不可欠であると考え、訪問看護でのリンパ浮腫高齢者への支援について訪問看護の機能を考慮した看護介入について構造化されたものは存在しない。そこで、訪問看護の機能を有効に活用し、課題解決に焦点をあてた訪問看護介入リンパ浮腫ケアプログラムを構築することにより、訪問看護でのリンパ浮腫ケアが充実し、リンパ浮腫高齢者の症状悪化を防ぎ、ADL (Activities of daily living) や QOL (Quality of life) を維持した生活の実現につながると考えた。

《目的》

本研究は、リンパ浮腫をもつ在宅高齢者への訪問看護介入リンパ浮腫ケアプログラムを構築することを目的とし、第一部ではリンパ浮腫をもつ在宅高齢者への訪問看護師のリンパ浮腫ケアの実践を明らかにする。第二部ではその実践を基に、リンパ浮腫をもつ在宅高齢者への訪問看護介入プログラム案（以下プログラム案）を考案し、プログラム案の活用可能性と改良点を明らかにする。第三部ではそれらの結果を踏まえて、プログラムを洗練化する。

《方法および結果》

第一部では、リンパ浮腫Ⅱ期の状態を維持している（3か月以上）在宅高齢者へのケアの経験がある訪問看護師を対象に半構造化面接を行い、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。訪問看護師のリンパ浮腫ケアの実際は、＜高齢者を支えるフォーマル、インフォーマルの支援と訪問看護師との信頼関係＞が基盤となつて＜生活上の留意点と継続への支援＞、＜高齢者ゆえのデメリットと対応＞が実践され、＜生活に密着した複合的理学療法の提供と効果＞に繋がっていた。その結果、＜望みの仕事復帰や夫婦での充実したひととき＞がもたらされていた。一方で＜リンパ浮腫ケア時間の制限とマンパワーの未充足＞と＜リンパ浮腫外来やケアマネジャーと医師や看護師との協働、連携の課題＞という課題も明確になった。第二部では、第一部の結果を基に、プログラム案および実践ガイドを作成した。プログラム案は在宅で療養する高齢者のリンパ浮腫に対し、訪問看護師が訪問看護の特徴を活かし、効果的に高齢者の ADL, QOL が維持につながるリンパ浮腫ケアが提供できることを目標に、介護保険の要支援・要介護認定を受け、リンパ浮腫を発症し、訪問看護を利用している 65 歳以上の高齢者を対象に、訪問看護師が実践するものとした。プログラム案は介入時期を 3 つのセクションに分けて設定し、それぞれに具体的目標を提示し、リンパ浮腫ケアの方法・内容の構成要素は、【対象把握と多様な対象のニーズに応える】【高齢者の特徴を考慮したケア】【ライフスタイルをふまえた指導と継続への支援】【訪問看護の強みを活かした生活に密着したケア】とし、ケアに影響を及ぼす要素は、【家族と周囲の人々との関係構築】【訪問看護システム上の課題】【チームケアにおける多職種との連携】とした。続いて、在宅高齢者へのリンパ浮腫ケアを実践している訪問看護師に、プログラム案の内容を参考に訪問看護時にリンパ浮腫ケアの実施を依頼し、複数回の訪問後、半構造化面接を行い、プログラム案の活用可能性と改良点についてインタビューを行った。プログラム案の活用可能性は、＜多様な対象に対して導入時のアセスメント視点はニーズの把握に役立つ＞、改良点については、＜訪問頻度や導入時の浮腫の程度を考慮したセクションの期間、時期の設定が必要＞等に集約された。第三部では、この結果を基に、リンパ浮腫の程度によって時期の設定、プログラムの展開を修正すること、また導入時の浮腫の程度や高齢者の浮腫の受け止めを配慮したプログラムの展開と優先すべきケアの検討を行い、それらを踏まえて、プログラムの構成要素の【ライフスタイルをふまえた指導と継続への支援】と【訪問看護の強みを活かした生活に密着したケ

ア】を【生活に密着したリンパ浮腫ケアと継続への支援】に統合し、第2セクションを浮腫の程度によって『集中治療期』と『維持治療期』に分けて展開し、各々で優先度を考慮しケア内容、ケアの受容へのアプローチなどについて追加、修正した。

《結論》

本研究プロセスを経て、訪問看護師の実践を構造化し、プログラム案を考案し、活用が可能となるよう洗練化し、訪問看護の機能を有効に活用し、課題解決に焦点をあてた訪問看護介入プログラムとして構築した。リンパ浮腫をもつ在宅高齢者に対し本プログラムを活用してリンパ浮腫ケアを実践することは、訪問看護でのケアの充実につながると考える。ただし、今回の調査対象者がリンパ浮腫ケアに熟練した訪問看護師であったことから、汎用化に向けて訪問看護師への調査や患者への介入調査による有用性の検証が必要と考える。

論文審査結果の要旨

がん手術に伴うリンパ節郭清術等に起因して発症した続発性リンパ浮腫(以下、リンパ浮腫)をもち、在宅で療養する高齢者に対しては、訪問看護によるリンパ浮腫ケアの充実が望まれる。本研究はリンパ浮腫をもつ在宅高齢者への訪問看護介入リンパ浮腫ケアプログラムの構築を目的としている。第一部で研究者は、リンパ浮腫Ⅱ期の状態を維持している(3か月以上)在宅高齢者へのケアの経験がある5名の訪問看護師を対象に半構造化面接を行い、質的統合法(KJ法)による分析を通して、訪問看護師によるリンパ浮腫ケアの実際と課題の構造を明らかにした。第二部では第一部の結果を基に、「介護保険の要支援・要介護認定を受け、リンパ浮腫を発症し、訪問看護を利用している65歳以上の高齢者」を対象とした訪問看護師による実践のプログラム案および実践ガイドを作成した。プログラム案は介入時期に従って3つのセクション(第1セクション:介入開始時、第2セクション:介入開始から1ヶ月の間、第3セクション:介入開始から1~2ヶ月の間)に分けられ、【高齢者の特徴を考慮したケア】などリンパ浮腫ケアの方法・内容に関係する要素4項目、【家族と周囲の人々との関係構築】【訪問看護システム上の課題】などケアに間接的に影響を及ぼす要素3項目、計7項目の観点から、セクション毎に実践もしくは調整すべき事柄が記されている。これまで訪問看護でのリンパ浮腫高齢者への支援に関して訪問看護の機能を考慮した看護介入を構造化したものはなく、これは本研究の独創性といえる。続いて研究者は、在宅高齢者へのリンパ浮腫ケアを実践している9名の訪問看護師に、このプログラム案の内容を参考にした訪問看護時でのリンパ浮腫ケアの実施を依頼し、複数回の訪問後、半構造化面接を行なった。その目的はプログラム案の活用可能性と改良点について調べるためである。その結果は、プログラム案の活用可能性は、＜多様な対象に対して導入時のアセスメント視点はニーズの把握に役立つ＞、改良点については、＜訪問頻度や導入時の浮腫の程度を考慮したセクションの期間、時期の設定が必要＞等に集約された。この面接結果を踏まえ、第3部ではプログラムの洗練化が行われ、第2セクションを浮腫の程度によって集中治療期と維持治療期に分けて展開するなど、結果の発展性と応用面での意義も認められる。

以上により、本論文は本学大学院学則第11条第2項に定めるところの博士(看護学)の学位を授与するに値するものと認める。

(主論文公表誌)

Health,11, 1529-1541, 2019